Bryna Goodman
Native Place, City, and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853—1937

帆刈浩之

「近代」というものは歴史概念である。中國の近代を如何に構想するかということは、ひとえに研究者の歴史認識に關わる問題であり、同時にそれは認識主體が置かれた時代や社會の様態によって規定される側面が強い。例えば、「傳統と近代」という古くて新しい問題がある。かつて、アジアにおいて近代が光り輝くものとして想定された時代にあって、傳統は克服されるべきもの、捨て去るべきものとされた。しかし今日、傳統とは創造されうるものであり、また變わりやすい表層部と變わりにくい深層部が存在する、などという指摘もあり、二分法的な發想は嚴しく批判されている。西洋近代の經驗から導かれた理論に依據するのではなく、中國の内在的な歴史過程を踏まえ、より開かれた概念として中國の近代を構想しようとする試みは始まったばかりである。

改革開放政策後の中國、特に華南地方では經濟の活性化にともない、宗祠の修復、族譜の編纂など同族組織の發展を示す動きが顯著となってきている。海外華人と結びつきながら國境を越えて擴大する民間經濟に一定の秩序を與えるものとして地緣・血緣關係という傳統的な社會的結合が重要な役割を果たしているのである。このように一見、傳統の復活とも受け取れる事態に對して歴史家は如何なる方法論で臨んだらよいのだろうか。

本書の著者がこうした中國の現實を踏まえた上で、同郷組織を題材にナショナリズムという近代中國の大テーマの再檢討に取り組んだであろうことは想像に難くない。具體的には、國家統合に向けたナショナリズムが準備され、高揚していった時代、すなわち一九世紀中期から一九三〇年代の上海において、傳統的組織としての同郷組織が如何に重要な役割を果たしていたか、ということを現地上海での資料收集・インタビューによって示そうとしたものである。(1) まず、本書の概要を紹介する。

第一章　導　　入

傳統中國では出身地の觀念は個人のアイデンティティーの重要な構成要素である。上海に暮らす移住者にとって故郷との繋がりは單に精神的なものにとどまらず、社會經濟的な側面も強く有していた。冠婚葬祭に際しては里歸りすることが期待され、また故郷の經濟的支援によって實現した移住であれば、故郷への送金は不可缺であった。そのため、移住はあくまでも一時的滯在と見なされ、移住者のアイデンティティーに大きな變化は生じなかった。それは彼ら自身が「旅滬寧波人」「寓滬廣東人」等と自稱していたことからも窺える。客地での苦境は同郷者の協同を促し、廟・義塚・殯舍の設置を皮切りに、同郷會館の設立が相次いだ。これは故郷との繋がりの強化と同時に、上海の同郷者コミュニティーの再構築をも意味し、教育・食事・娯樂・宗教などの文化活動を通して同郷結合は強化された。

上海での日常生活においては三つのレベル――出身地・都市（上海）・國家（中國）――でのアイデンティティー形成が想定可能である。方言や宗教などの違いを有する出身地アイデンティティーはもとより強固だが、租界という半植民地状況は「上海人」としてではなく、「中國人」としてのアイデンティティー形成を促進したのであった。

W・ロウはその都市漢口の研究の中で、一九世紀後半の漢口において同郷・同業「ギルド」の「非偏狭化」「固有の合理化」が進行し、新式の同業團體が登場したとして、中國の都市發展を展望した。しかし、彼は中國大陸の學者と同様に組織の名稱や形式的構造に焦點を當てたため、新式團體の内部に存在したアンフォーマルな同郷性といった要素を見過ごす結果となった。一九世紀後半に同郷結合は消滅し、これに代わって漢口アイデンティティーが成立したとする、W・ロウの議論に對して、本研究は次の二つの點で異議を唱えることができる。即ち、上海都市社會における出身地による區分の強靱さ、そして上海の領域を越えた同郷結合の重要性、という二點である。無論、出身地アイデンティティーの維持はより高レベルのアイデンティティーへの轉化（特に國家への）を否定するものではない。都市におけるアイデンティティーの變容は、出身地アイデンティティーから、新しい、より「近代的」なものへと置き換えられるようなものではなく、「アイデンティティーの増大過程」（"process of accretion of identities"）（四六頁）として理解することができるのである。

第二章　外國帝國主義、移住と混亂：アヘン戰爭後と小刀會蜂起

開港後、上海の政治・社會構造は大きく變容する。一つは、租界の設置と外國貿易の發展による商人層の社會的地位の向上である。もう一つは大量の移民流入に起因するものである。特に外國商社の上海進出に伴う廣東人（富裕な買辦商人からコック・船舶修理工など下層勞働者を含む）の勢力擴大は顯著であった。下層勞働者は求人斡旋・生活保障を求めて同郷の幇に結集したが、一部の失業者などは幇會・會黨といった祕密結社に組織化され、都市の治安を脅かす存在となった。祕密結社と同郷會館は、客地における生計と自己保全の爲の諸活動（商業・宗教）を擔う存在という點において根本的な相違はない。法制度が不整備な環境下では商人エリートによる商業紛爭の有效な解決手段として祕密結社の「暴力」が利用されたのである。そして、爲政者も同郷會館に對して都市の秩序維持の役割を期待したのであった。小刀會蜂起において、都市のごろつきは治安維持と秩序破壞という相反する役割を擔ったが、その際、同郷會館が組織化の基礎となっていたのである。

第三章　コミュニティー、階層そして權威：晩清、同郷文化の形成におけるエリートと非エリート

一九世紀六・七〇年代、太平天国後の上海には大量の難民が流入し、同郷會館の指導者たちは會館の活動範圍を擴大し、同郷コミュニティーの強化を圖った。當時、會館の運營はごく少數のエリートが獨占していた。例えば、廣州・肇慶出身者が組織する廣肇公所では董事（成功した商人・買辦・官僚など）が週に數回集まり、金錢貸借・相續・商品價格の變動・株主の協定・會館財産の運用・財産侵害・關税・商店紛爭・徒弟制・勸捐など多様な業務に關して話し合いがなされた。一方、職人や勞働者など下層同郷者の生活扶助は「幇」「殿」「會」といった同郷サブ・グループが行っていた。基

本的に下層民と會館との直接的接觸は高次の交渉を要する場合（對官憲など）に限定されていた。

しかし、會館による宗教・娯樂・慈善などの活動の擴大はこうした非エリートを含めた形での同郷コミュニティーの形成・強化を促した。そして、これは會館指導者たちの富と地位に大きく依據するものであり、これによって彼らは會館をより安定したヒエラルキー構造へと再編し、自らの支配的地位を確立することができた。また、災害救援や善堂への捐助によって都市上海における同郷コミュニティー全體の名聲をも獲得することができたのである。

第四章　擴大する活動：慈善、近代的企業、都市と國家

一八七〇年代、汽船の就航や華字新聞の發行など、コミュニケーション手段の發展を契機に、廣東・浙江（後には江蘇も）といった有力な同郷會館の買辨商人たちはそのビジネスネットワークを擴大するとともに、慈善活動を全國規模で展開していった。商人たちの擴大する活動は會館相互間の競爭を促すとともに、都市や國家など、より廣範圍の規模における協同をも生み出すに至った。愛郷心というものは必ずしも都市・國家規模での協同の障害とはならないのである。

また、都市行政とりわけ治安維持・釐金徴收において、「官」との提携が實現する。同郷會館は都市の官僚システムの網の中に組み込まれていったのである。こうした「官」との關係は洋務運動の過程において一層緊密になる。列強との「商戰」に打ち勝つ爲の資金や技術を切望する李鴻章や上海道臺丁日昌らの利害と國家からの保護によって勢力擴大を目指す廣東人買辨商人たちとの思惑は輪船招商局における「官督商辦」という形での連携を生み出した。鄭官應・唐景星・徐潤といった廣東商人は他の開港場の廣東會館との關係に依據して商業ネットワークを擴大し、招商局の貨物輸送業務を支配していった。こうした中、寧波商人は獨自の汽船會社設立を申請するなど對抗する動きを見せる一方、新聞『申報』は寧波ジャンク船の利益を擁護し、廣東商人の獨占支配や政府の過剰な補助金を批判したのであった。これに對し廣東商人側も『匯報』を發刊して對抗した。このように當時の新聞に出身地別レッテルが貼られていたという事實は上海の華字新聞の非中立性や大衆メディアとしての限界性を示している。

第五章　同郷組織、外國權力と初期の民衆ナショナリズム

上海の外國權力は租界設置當初から、租界の治安維持において同郷會館の役割に大きく依存していた。具體的には租界警備費への資金援助、會審衙門における中國人が關わる民事案件の審査協力などの面において見られたが、それは會館が租界内の中國人社會を代表する存在であったからである。

租界の擴張を契機に、會館が所有する公共墓地やその保管する棺柩が外國權力との衝突の火種となる。從來、一八七四年及び一八九八年の二度に渉る四明公所事件は、民衆ナショナリズムの先驅として、或いは葬送という中國の傳統文化への強い關心を示すものとして敍述されてきた。しかし、より重要な點は寧波人の暴動において同郷コミュニティーが民衆動員の基礎となっていたこと、換言すればこの時期の抵抗運動は同郷コミュニティーという既存の枠の外部では起こり得なかったということである。尚、兩事件の相違點は後者において中國の主權を擁護するという形で「中國人民」對「外國人」という對立軸が明確に示された點にある。こうした民衆ナショ

ナリズムの成長に加えて、非エリートの擡頭という會館内部の權力關係の再編成という事態も一九世紀末期に見られた重要な變化である。

第六章　出身地と國家：反帝國主義と民國革命運動

二〇世紀初頭、反帝國主義運動が幾度となく上海を搖さぶったが、その過程で同鄕會館のリーダーは民衆の愛鄕心に依據して、愛國運動を引き起こしていった。一九〇四年のロシア人水兵による寧波人人力車夫殺害事件、一九〇五年の反米ボイコット運動、そして同年發生した會審公廨事件などにおいて、廣範な上海民衆が動員され、そこでは國家アイデンティティーや中國の主權に關する主張がなされていた。そして總商會といった新式社團が結集の受け皿となり、抵抗運動が展開された。從來、この運動は一つの幇に限定されない都市規模の反帝運動であったと評價されてきたが、實際には運動への參加や動員は各同鄕會館レベルで決定・執行されており、同鄕結合の果たした役割は重要であった。會館のリーダーは中國人社會の代表として外國權力との仲介役を擔うと同時に、國家利益と同鄕者の利益の双方を促進する役割を果たしたのである。

また、上海獨立に成功した革命運動に對して同鄕會館は革命宣傳、軍事費・兵士の調達などの面において重要な貢獻をした。總じて出身地アイデンティティーは都市における民衆の政治運動や組織への參加の基盤となっていたのである。

第七章　「近代精神」、組織變革と軍閥政府の影響

民國期に入ると、同鄕會館は高次の政治レベルでの發言力を失い、活動の中心は宗教や慈善へと移り、新たに「近代」的な組織として登場した同鄕會が廣範な社會活動を行うようになった。兩者のリーダーシップ構造に大きな相違はないが、同鄕會設立の背景には會館の保守性・エリート主義に對する勞働者や學生らの批判が存在した。自然災害や軍閥混戰下の地方からの避難民流入により、依然、上海は移民都市として存在し續け、三〇年代に至るまで上海の會館と同鄕會の數量はそれぞれ增加傾向を示していた。

經濟面においても上海に勃興した近代工業が必要とした工場勞働者は同鄕のネットワークによってブローカーの出身農村から供給されていた。また、劉鴻生・虞洽卿といったブルジョアジーも同鄕ネットワークを利用して企業活動を展開した。また同鄕組織は戰亂で荒廢した故鄕に對する救濟活動を行うなど、軍閥期の混亂下、政治・經濟面において有效に機能していたといえる。

第八章　出身地と國家：ナショナリズム、國家建設と公的戰略

從來、ナショナリズムや近代性の劃期と見なされた五四運動において、同鄕組織はボイコットの決定・宣傳・組織化などの面において重要な役割を果たしていた。「一致對外、愛鄕愛國」という當時のスローガンに示されているように、同鄕結合のナショナリズム形成への貢獻面が強調された。それは「大團體」（國家）の一構成要素としての「小團體」（同鄕組織）という形で認識されていたのである。そこにおいて同鄕會は會館とは異なり、重要な政治主體として顯現していたといえる。

二〇年代後半、各界連合會・勞働組合・政黨の發展によって、同鄕組織は政治舞臺の片隅へと追いやられたが、一九三二年、南京政府による民間團體の取締り強化の中、同鄕組織も國家の管理を受けるに至る。國家による承認は同鄕組織に正統性を付與したが、南京政府による統治の不完全性・不平等性・抑壓性ゆえに、同鄕組織は

獨自の様々な戦術によって市民的立場（civic ground）、すなわち公共活動の正統性の基礎を創造していった。それは、眞の立憲國家を準備する地方自治實現の主張、有力パトロンとのコネ、より明確なナショナリズムの表明などの公的戦略（public maneuvering）として實現された。

第九章　結論：文化、近代性と民族アイデンティティーの源泉

清末民初期の反帝國主義運動・ナショナリズム形成・民衆動員において、同郷組織は重要な役割を擔った。より廣く民族アイデンティティーにまで統合されていく中間團體のアイデンティティーとしての出身地アイデンティティーの特色として、以下の二點が擧げられる。一つは、家族・宗教・村落など親近性の強いコミュニティーとは對照的に、同郷コミュニティーはそうした定型の、親近性の強い集團の枠を超越しており、想像上の出身地の復元に基づいているということである。もう一つは、商人・學生や勞働者らによる新式の都市組織とは異なり、出身地アイデンティティーは近代ナショナリズムの形成に重要な役割を果たす領土・祖先・文化・言語に關する感情を一體化するということである。

これまでの議論から、近代中國を分析する際の從來の基本的認識の枠組みに關して見直しが必要であるということがわかる。第一に「文化」概念に關する疑問である。「文化」は固定的・「傳統」的なものとして捉えるのではなく、可變的で新しい意味やイデオロギーの影響を受けやすい、開かれた概念として用いることが適當である。本書で取り上げた出身地觀念や同郷組織の活動などは一九―二〇世紀中國の都市の景觀において強力かつ身近な、一目瞭然の「文化要素」といえる。しかし、從來それらは文化の連續、「黨派主義」の目印、さらには個人／社會アイデンティティー形成の失敗の證しとして捉えられてきたのである。今後は、出身地の意味の變化、同郷ネットワークの組織上の革新と發明、エリート非エリートのコミュニティー内での認知の違いなどを考察することで、「歴史」と「文化」、更に「文化」と「近代性」の間に存在する溝を埋めることができるのではないか。

再檢討すべき第二の枠組みは「近代性」の問題であるが、それは西洋の經驗から導き出された「目標」であってはならない。本書の内容との關連で言えば、組織上の革新、民主化、ナショナリズムの成長、政治動員の擴大といった「近代化」と目される過程が指摘できる。しかし、問題にすべきはそうした過程の觀念的意味ではなく、我々自身の發想を中國の文脈に沿う形で如何に再構成するかということなのである。總商會や上海城廂内外總工程局など新しい組織の設立を強調するのではなく、「より古い」組織との相互作用の在り方を考察する必要がある。變化の重要性を否定したり、「傳統的」とか、「不完全」などというレッテルを貼ることが重要なのではない。私たちの（西洋的）近代性との「相似」の指標として捉えるのではなく、中國社會の現實の變化の具體化、そして私たちの術語や前提の再定義という方向で議論すべきなのである。そうすることによって中國文化のダイナミズムが再發見できるであろう。

以上、著者は清末から民國期の同郷組織の分析を通して、近代上海史を「社會」の側から描寫し、出身地アイデンティティーが反帝國主義運動や近代ナショナリズムの形成において重要な役割を果たしていたことを見事に論證した。聲高に叫ばれる政治スローガンや洗

練された商工組織誕生の背後で實は舊來のメカニズムが機能していたという事實、しかし、それを西洋の視點から中國社會の停滯性と見るのではなく、あくまで中國の文脈において捉えようという姿勢がはっきりと窺える。さらに、同鄉結合という「傳統」的要素の見直しに際して、それを人々を束縛する「遺制」として捉えるのではなく、人々が自らの戰略として利用したのだという觀點、そうした行爲論的方法は日本における明清史研究の近年の傾向とも共鳴する部分があるように思われる。總じて、今後の中國社會史研究のあり方を模索する上で重要な提言を含んだ貴重な著作であると言えよう。以下、個々の記述の檢討ではなく、著者の問題提起を受けながら、本書の內容に關連する社會史研究の方法的枠組みについて檢討していきたい。

まず、同鄉組織が行った都市における公共的活動の擴大に示される、「公」的領域に關する問題がある。近年話題の「公共的領域」（"public sphere"）をめぐる論爭について本書の著者も無關心ではない。まず、著者は本來、「公共的領域」を議論する前提として、當該社會に非官僚主導、自治、新聞での公開討論を通して形成される獨立した世論の發達などが必要であるとする。そして、同鄉會館の設立や運營に官僚が關與していた事實を擧げて、「公共的領域」論を太平天国後の上海社會に適用することを否定する（一二〇頁）。[2]

また、民國期における都市の市民的活動もこれまで多くの研究者によって「市民社會」や「公共的領域」との關わりで議論されてきたが、著者はそれらがしばしば「都市の市民權」の行使や國家から完全に自立した社會領域の存在についての敍述に集中してきたことを批判する。すなわち、このような自治、或いはその對極にある國家管理に對する強調は、完全な自治ではないが逆に國家に管理されているわけでもない狀態における「公的戰略」を無視することになる、という。そして、ヨーロッパ・モデルではない、中國の文脈に適したモデルを探求すべきだとする。それは、民國期の總商會や同業公會など「合理的」形式を備えた政治・經濟組織の構成要素が個々の市民ではなく、同鄉會であったと著者が指摘するように、同鄉會と國家との關係の中に求められているのである。兩者の關係は、「自治ではなく、部分的自治・相互浸透・妥協という變化する領域の表現として最もよく理解できる」のだという（三〇四頁）。

ここでは確かに、近代西歐の「公共的領域」論の中國社會への適用、すなわち、民間社會における「自治」の擴大の延長線上に近代化への展望を開くという觀點は明確に否定されている。しかし、「公」的領域を「國家」と「社會」との中間に配置していることからも窺えるように、馴染みの「國家と社會」という枠組みがここでも採用されているのである。同鄉組織（または組織のエリート層）が「國家」と「社會」を仲介する役割を果たしていたという見方にはアメリカにおける中國地方エリート研究の方法論を連想させるものがある。そして、それは「國家」と「社會」ばかりか、「傳統」と「近代」、「農村」と「都市」、「中國」と「西洋」を仲介する役割も擔ったのだという。評者も中國社會における「仲介」（"brokerage"）機能の役割を重視しているが、それはエリート特有の役割としてではなく、むしろ普遍的な社會習慣として、つまり、誰もが、仲介者たり得るが故に社會關係の增加がネットワークとして無限に擴張してゆくという中國社會固有の秩序形成のあり方との關連

で捉える必要があるように思われる。

このように本書の題材は上海の同郷組織であるが、方法論としては中國の地方エリート研究の範疇に屬すものと考えられる。すなわち、本書はエリートが社會的地位向上のために利用する様々な資源の一つとして、同郷ネットワークが近代上海において有效に機能したのだということを明らかにしたものとも言えよう。それでは、中國の文脈において同郷組織を位置づけようとする場合、どのような方法論に依據すればその固有性に迫ることができるのであろうか。

著者は同郷組織の社會的活動に「公」的領域を見いだしながらも、結局その歴史的評價に關しては判斷を保留している。それは「公」の意味を中國の文脈から捉えていないからではないか。そもそも中國における「公」概念は官僚の事業、共同の利害の實現、など様々なアスペクトを内包しているが、日本における「公」概念が領域性を意味するのに對して、中國では「つながり的共同」を表すものとして用いられるという意見がある。そして、現實社會では地縁・血縁などといった排他的なつながりの共同こそが「公」縁であり、そこにおいて「私」はもっとも活潑に機能するのだという。(3)

「公」か「私」かという問題は、行爲者の相互關係性に對する認識に關わってくる。つながりの部外者からは「私」だと價値判斷されるような事柄も、そのネットワークに參加している者にとっては「私」が調和的に實現される狀態（＝「公」）なのである。したがって、「公」の擴大は公共的活動の領域的擴大としてではなく、むしろ實質的な「私」的ネットワークの擴大として理解することの方がより中國社會の實態に近いように思われる。ちなみに、著者は唐景星など會館指導者（その多くは洋行の買辨）が有した同郷ネットワークが上海や故郷という範圍を超越していた事實を擧げ、上海アイデンティティーの無效性を指摘する中で、彼らをコスモポリタンな人物と評している。これこそ、まさに「官」や外國商社ともつながりを有した彼らの「私」的ネットワークの擴大狀況を端的に表現したものとして理解することができよう。

契約や法によって制度的に保障されていない社會關係は柔軟性に優れるが、その反面、構造的には非常に脆弱である。そこで「私」的ネットワーク維持に要する膨大な「公共」コストは「私」的經濟活動の利益によって應分に負擔されることになる。清末民初期、中國各都市で展開された地方エリートによる慈善活動は彼らのネットワーク（地域、同郷、民族などをつながりの契機として）形成による富の蓄積と密接不可分の關係にあった。この時、地方エリートたちの「私」的利益も增大していたのである。二〇世紀に入り、ナショナリズムの高揚に伴い、外國資本とのビジネスが政治イデオロギーによって否定されると、政治的表現である「愛國」や非政治的な表現としての「慈善」を掲げた經濟行爲のみが容認されるようになる。ここにおいて、民族の利益が他の利益に優先する「公」として社會的に認知されていた狀況が示されている。

もっとも中國社會における「慈善」は單なる社會福祉の問題ではなく、政治・經濟・文化にわたる社會の全體構造の問題として捉える必要がある。歴史性や地域偏差などを考慮しつつも、「慈善」を長期持續的な社會文化システムとして捉えた場合、それは各「私」的ネットワーク内における利益の適正配分、つまり「公」の實現への意志表示であると考えられる。このように「公」と「私」が相對

的な關係にある中國のような社會において、「公」を領域として設定することで、社會の內部に質的な發展を見出すことが可能であろうか。

次に中國社會における同鄉結合の歷史的意味に關して檢討してみたい。著者は、同鄉結合を長期持續的であるが可變的な「傳統」文化として捉え、同鄉組織の表面的な「近代化」（組織の刷新など）ではなく、同鄉の意味の歷史的變化に注目すべきであると述べている。そして、こうした觀點から、近代上海における歷史的事件を分析し、同鄉組織の活動や出身地アイデンティティーの役割を再評價したことは先に紹介した通りである。しかし、そこでは組織化の基礎として同鄉結合の有效性が再三強調されているにも關わらず、なぜ同鄉結合が有效に機能したのか、また、それが中國の社會文化システムと如何なる關連を有するのかという點にまでは十分に考察が及んでいないように思われる。以下、中國社會における人の移動の問題との關連において若干論じてみたい。

上海には多樣な出身地アイデンティティーが存在し、同鄉人のコミュニティーが形成され、それぞれ同鄉結合が強化されていた。同時に下層民の代名詞とされた「蘇北人」との對比において、紹興人・無錫人など江南出身者は「上海人」として自己認識することもあったが、都市としてのアイデンティティー形成は遲れたのである。このように、ある都市における出身地アイデンティティーは戰略的に選擇され得るものであるといえる。[4] しかし、中國社會における同鄉性の持つ問題は一都市內における政治力學的分析では十分に說明できないように思われる。

そもそも「客寓」（“sojourning”）という表現は儒敎倫理との關連において發生したものである。祖先の土地から離れることを禁忌とする價値觀が支配する中國社會においては官務と商務のための客地滯在のみが許されていた。すなわち「旅」や「僑」は人々が自由な移動を實現すると同時にそれを正當化するために用いられた表現であると言える。

地緣性に基づく同鄉會館を同じく「ギルド」と呼稱されてきた業緣性による行會から區別して、科擧立身と商工立身という都市（上昇）志向の社會移動の文脈に位置づけたのは何炳棣である。[5] 商業會館の分布は行政系統とは異なる形での都市化（商業化）の進行過程を示しており、會館が明淸期の社會經濟の發展に大きく貢獻したことが指摘された。商業會館の場合、故鄉と客地とを結ぶ商業ルートの發達を前提にして人の移動は促進される。移動に要する資金やコネといった社會的資源はまず故鄉において準備されていた。從って同鄉結合はまずもって故鄉とのつながりにおいて考察される必要がある（無論、移住先における定住化過程で故鄉との關係性の意味は變化するし、定住後の生存戰略として同鄉結合が再強化されることもある）。家族や同族村落への忠誠心は遠く離れた客地と故鄉をつなぐ基礎であり、同時に國家から相對的に自立した小集團による一種の自治狀態を創出したのであった。そして、こうした事態は近代以降の交通・輸送・情報傳達などの技術革新によって一層強化されていった。[6] 「近代」は國家への統合というベクトルと同時に、地域閒ネットワークのつながりを強化する側面をも有したのである。

著者も上海の潮州商人と彼らの故鄉との關係について興味深い事例を紹介している。汕頭にあった六邑會館は砂糖・米・大豆の船舶

輸送業務を上海の潮州會館と連携して行っていた。一九二一年、上海潮州會館は船舶會社に運賃値下げを認めさせた他、潮州商人の貨物を載せた船が沈没した際、上海の廣肇公所と粤僑商業聯合會と共同して、支拂いを澁る保險會社に保險金を支拂わせることにも成功している。また、上海の潮州商人は潮州會館において帳簿をつけており、汕頭の商店への送金業務も潮州會館が行っていた。この他、故郷での災害救助活動や病院や慈善組織への援助、減税請願、教育普及など各種の公共活動に潮州會館は關與していたという（二四一～二四二頁）。

こうした故郷と客地との緊密なつながりは商業活動の廣域化と相俟って、同郷商人の商業ネットワークの形成を促進した。とくに中國東南沿岸地域では大量の移民を海外に送出しており、そのネットワークは廣域化し、多様な機能を果たしていたのである。同郷結合の問題は一都市内の問題としてではなく、故郷と客地との二地點間、さらにより廣域のネットワーク關係の中に位置づけることで、組織の原理的問題が浮かび上がってくるように思われる。

戦前期、日本の中國研究者は中國の「ギルド」に多大な關心を示してきた。そして、そこで論じられた中國の「近代化」への展望の多くは「ギルド」的結合が國家的結合の基礎になり得るというものであった。[7] 同時代としての近代に生きた革命家・思想家にとって、近代的國家の建設は焦眉の課題であり、「ギルド」的結合を國家構想に生かそうとする發想は當然であった。本書の著者も五四期の毛澤東が著した「民衆的大聯合」や孫文の一九二四年の三民主義講演での「大團體」への指摘に言及している。

このように同郷結合は近代という時代にあって中國ナショナリズムと共鳴しあう局面を有したが、中國の中央權力が國家として海外華僑を含めた民間社會を直接的に統合しようと試みたのは清末以降の比較的新しい事態である。それ以前より、華南地方からの移民によって形成された東南アジアの海外華人コミュニティーでは、例えば仲間主義的結合によって「公司」と呼ばれる自立した組織體が成立している。これは現在の會社組織につながっていく民間社會の組織原理として考察される必要があろう。さらに現地社會との融合を經て、メスティーソ・ペラナカン・ババなどといったクレオール社會が形成されていったのである。[8] 清末以降の民族主義の潮流に目を奪われ、その結合力のみを強調すると、中國の「ギルド」的結合が持つ融通性・異化性が見失われてしまうであろう。

中國大陸が國を閉ざしていた時代を除いて、基本的に漢民族社會を裏で支えた民間經濟の活力の源泉は地縁・血縁など「ギルド」的結合であった。國境を越えて形成されたネットワークでは各種の社會的資源（勞働力・資金・商品・信用・情報など）を相互に提供し合う形で自己利益の擴大化が圖られた。そこでは組織の團結力よりは、むしろ融通性や異化性こそが有效に機能していたと考えられるのである。

ネットワークの視點は宗族・善堂・同郷會館などの諸社會組織を垂直方向に國家へ統合される、固定された「小團體」としてではなく、國境さらにはエスニックの壁をも超え得る、水平方向につながれた社會關係の蓄積、つまり一つの「範圍」として位置づけることを可能にする。[9] その場合、國家は關係がつながれる對象の一つに過ぎず、無限に擴大する「私」的ネットワークによって内部浸食される存在としてもイメージされ得るのである。

これまでの歴史敍述において、人々は共同體や國家などが前提とする「領土」への所屬によってその存在をアイデンティファイされてきた。しかし、今後重要になるであろうグローバルヒストリーという構想に立脚した場合、生身の人間が移動する空間こそが關心の的となり、移動の障害として立ち現れる國家の存在はより相對化を迫られていくと考えられる。(10) これは「中國の文脈」にも呼應するものと言える。流動性の高さが中國社會の常態として認識され、「人の移動」というテーマはすでに研究の重要なトピックとなっているが、これを研究方法論として如何に構想すべきか、これは私自身の課題でもある。

註

(1) 著者が上海市檔案館所藏の同鄕會館の一次史料（董事會會議錄が中心）を大量に利用した點は特筆すべきである。從來、民間社會の歴史的實態は史料的制約から十分に解明されてこなかった。會館など社會組織の史料といえばこれまで徵信錄や碑文などが知られているが、組織の日常的活動を知る手がかりとなる史料は依然として稀少である。今後、海外華人社會の史料とのつき合わせが必要となろう。

(2) 「公共的領域」論の上海史への適用に否定的な見解は、著者の論考も收めた Frederic Wakeman, Jr. and Wen-hsin Yeh, eds., *Shanghai Sojourners* (Institute of East Asian Studies, University of California, 1992) にも示されている。

(3) 溝口雄三「中國の『公・私』」上・下『文學』五六―九・一〇、一九八八年、のち『中國の公と私』研文出版、一九九五年、に收錄。

(4) Emily Honig, *Creating Chinese Ethnicity : Subei People in Shanghai, 1850-1980* (Yale University Press, 1992).

(5) 何炳棣『中國會館史論』臺灣學生書局、一九六六年。

(6) Wang Gungwu, "Migration and Its Enemies", in Bruce Mezlish and Ralph Buultjens, eds., *Conceptualizing Global History* (Boulder : Westview Press, 1993), p. 138.

(7) 岸本美緒「「市民社會」論と中國」『歴史評論』五二七、一九九四年。

(8) Wang Tai Peng, *The Origins of Chinese Kongsi* (Selangor Dural Ehsan : Pelanduk Publications, 1994), G. W. Skinner, "Creolized Chinese Societies in Southeast Asia", in Anthony Reid, ed., *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese* (Sydney : Allen & Unwin, 1996), pp. 51-93.

(9) 費孝通『鄕土中國』香港：三聯書店、一九九一年。三二～三三頁。初版は上海、一九四七年。

(10) Wang Gungwu, *ibid.*, pp. 131-132.

Berkeley : University of California Press, 1995, xii＋367pp.